

研究ノート

デュルケームにおける
社会進化と沸騰的社会変動

Social Evolution and Effervescent
Social Change in Durkheim's Sociology

梅 沢 精
Umezawa Sei

1. はじめに

パーソンズ以後の社会学的カオスにおいてさまざまな可能性が模索されているが、そうした状況下にあってもなお——なぜなら、こうしたときこそ豊饒な古典の全面的再検討の必要があるのだから——デュルケームは1890年代のテキストを中心にしてしか、一般に理解されていないのが実状である。すなわち、『社会分業論』（1893）、『社会学的方法の規準』（1895）および『自殺論』（1897）の前期を形成するテキスト群である。したがって、J. C. アレグザンダー（1988, p.2）もいうように、「……社会学者たちは『デュルケーム主義』をもって、一方では外在的拘束と『強制的な社会的事実』の強調、他方では実証主義的方法しばしば定量的方法と同一視している」という状況が一般的となる。

しかし、デュルケームの社会学はその後大きく展開し、大著『宗教生活の原初形態』（1912）に結晶する。それは「オーストラリアのトーテム体系」という副題を持ちながらも、未開社会の単なるモノグラフィにとどまらず、かれの同時代をも射程に入れたより一般性の高い社会理論を提示している。そこでは、社会は個人に外在してかれを拘束するばかりでなく、「他方で社会は、個人によってしか、また個人のうちにしか存在しないし、また存命しないのである。社会の観念が個人の精神のうちに消滅したら、集合体の信念・伝統・熱望が個々人によって感じられ共有されることが停止したら、社会は死滅するであろう」（1912, p.496）と主張される。社会と個人とのよりダイナミックな関係性が開示されるのである。

また、方法的にも単純な定量分析にとどまらないことは、前期の諸著作においてさえ明らかである。社会を意味的な空間ととらえ、その妥当かつ合理的な《解釈》に志向したことは、『自殺論』においても変わりはない。ただ、『原初形態』においては、前期の金科玉条であった《科学》自体に対して、相対化が行われる。今日、科学的な知見が一種の特権的な信用をえているのは、その客観的価値のゆえばかりではなく、われわれが科学を信仰しているからである、しかも、「この信仰は本質的に宗教的信仰とかわらない」（*ibid.*, p.625）とデュ

ルケームはいう。さらにかれは、「説明すること（expliquer）は、かつて（未開社会から推測される原始時代）と同様今日においてもどのように或るものが他の一つまたは多くのものに関与するかを示すことである」（*ibid.*, p. 341）とし、宗教的・神話的思考の論理と科学的思考の論理との間に深淵はないと主張するのである。

このように、後期デュルケームはかれに対する実証主義的な固定観念を払拭する多くの知見に満ちている。われわれは、かれの前期の社会観を代表する定義、すなわち「社会的事実とは、固定化の有無にかかわらず、個人のうえに外在的拘束をおよぼすことのできる一切の行為様式である」（1895, p. 14）の呪縛から離れて、後期のテーゼすなわち「社会生活は、あらゆる局面において、またその歴史のあらゆる瞬間において、その広範な象徴主義^{サンボリスム}によってのみ可能となる」（1912, p. 331）に依拠して、これからデュルケームの社会変動に対する考え方を見ていこうと思う。

2. 社会進化論

デュルケームの社会変動論を考えると、まず頭に浮かぶのは《機械的連帯から有機的連帯へ》という進化図式であろう。いうまでもなく、かれは『分業論』においてこの二つの連帯様式の極概念を設定して、社会の歴史は成員の意識の類似性に基礎をおく機械的連帯が、しだいに成員の異質性に依存する社会的分業による連帯すなわち有機的連帯にとってかわられる進化の過程であることを示した。後論との関係で留意すべきは、まず、かれがこの進化の原動力を「社会的基体」（*substrat social*）の変化にしていることである。社会的基体とは、人口量や密度、その分布様式（都市・農村）、交通・通信手段や回路の性質など、人口統計学や地理学に関わる一切の、社会生活の基盤である。そして、これを扱う部門をかれは「社会形態学」（*morphologie sociale*）と名づけた。

すなわち、デュルケームの社会進化論は社会形態学的な基礎づけのうえに組み立てられているといえる。具体的に、かれは進化の原因究明において、まず

分業の進展と社会の環節的構造の衰退をとりあげ、その因果関係について、つぎの理由から環節構造の衰退を分業の原因としている。すなわち、「環節的構成は、分業にとって乗り越えがたい障害であり、それは、分業が出現しうるためには少なくとも部分的にすでに消滅していたはずだからである」(1893, p. 235) と。しかし、環節の隔壁が消滅しただけでは分業は現れない。分業と環節的構造の衰退との因果関係のあいだには、さらに媒介的な因果関係が存在している。すなわち、環節の隔壁が消えていくにつれて全体社会の容積が増し、多くの個人がより緊密に接触し《道德的密度》が高まる。そうすると、機械的連帯のもとでの類似したもの同士は、その類似性のために相互の欲求や利害が対立し、いわゆる《生存競争》が激烈になる。これは個人や社会の存続そのものの危機をさえ導きかねない。こうした事態を回避するために必然的に各人が分化して専門化し、利害や欲求の衝突が緩和される方向に圧力がかかる。こうして相互の依存・協力をもたらす分業に基づいた有機的な連帯が実現するのである。デュルケームが考えていた通時的因果連関は、つぎのようになろう。① 環節構造の衰退 → ② 社会の容積・密度の増大 (→ 道德的密度の増大) → ③ 生存競争の激化 → ④ 分業 (有機的連帯)

ここで、社会変動の主体とされているのは《社会的基体》であり、集合意識(表象)は基体の関数にすぎない。原始(未開)社会は環節的社会であるから、すなわち、その社会的基体の特性ゆえに、そこでの集合意識は個人をほとんど全ての面で同質的な鋳型に強力にはめ込むほど強制力の強いものである必要があった。機械的連帯はこうして保持される。しかし、分業に基礎をおいた社会では連帯はその《基体》の特性によっておのずから保証されている。むしろ逆に、個人の異質性を確保することが死活問題となる。したがって、個人の同質性を強いる集合意識の弱体化こそが社会的要請となってくるわけである。社会の歴史的変動の中軸は、社会的基体が環節的であるものから組織的-分業的であるものに移行することであり、それぞれの集合意識はその基体の特性によって従属的に変化すると見られているわけである。

もっとも、これも周知であるが、デュルケームは有機的連帯の同時代社会に

において、もはやいかなる集合意識も存在しない、あるいはする必要がないとは言っていない。「個人主義」の思想こそ唯一残った、また残すに値する同時代の集合意識であると力説する。かれの個人主義の中心理念である人格の尊厳への畏敬は「今日以降、多くの精神が集合する唯一の中心になる」(1893, p. 396)とされるが、しかし次のように限定される。

「たしかに社会から、この共同信仰（個人尊重）がもつすべての力が引き出されるが、しかしそれはわれわれを社会に結びつけはしない。われわれ自身に結びつけるのである。したがって、それは真の社会的紐帯を構成しないのである。」(*ibid.*, p. 147)

われわれの社会の真の紐帯は、あくまで社会的基体としての分業的關係にあるとデュルケームは見るわけである。

さて、かれの社会進化論において確認すべきことを最後に二つ指摘しておきたい。まず、第一は社会の歴史的進化は機械的連帯の極から有機的連帯の極に《漸進的》に移行するという点である。社会的基体の漸進的進化が社会変動の原動力であり、さらには、この進化は《自然史的》な《不可逆》の変動であると暗黙のうちに前提されている。ここにおいては、個々人のあるいは諸集団の主体的な歴史への関わりは無視されている。それは、デュルケームが、社会と一つの自然以外のなにものでもないという信念のもとに社会学の科学化を目指していたことと通底しているだろう。第二は、それぞれの社会的基体のうえで生活する人びとの在り方があくまで日常的なレベルで語られていることである。動的-道徳的密度が高まるにつれて、同質的な人びとの生存競争が激しくなるという推論は、あくまで人びとが日常的な経済生活を送っていることを暗黙の前提にした発想であろう。しかし後に見るように、非日常的かつ知的な生活すなわち集合的沸騰のなかにある人びとにとっては、こうした結論にはならない。

デュルケームの社会進化論は以上のような特性と前提をもっているのである。

3. 集合表象の意味の変遷

社会の進化にしたがって次第にその意味を失うかに思われた『分業論』における集合意識（表象）も、『社会学的方法の規準』では社会的基体とともに普遍的な社会的事実として捉えなおされる。思考・行動・感受の様式としての社会的事実すなわち行為様式は、社会の進化の程度に関わらずつねに個人の意識に外在し、かれの行為（faire）に拘束的な力をおよぼす。なかでも、法・道徳・宗教の三つの形態の集合表象は個人に対して《規制》的な拘束力をもつとされる。最初期の文章においてデュルケームは、それらが社会学の研究対象なのは、社会に対して規制的影響力を及ぼすかぎりにおいてである断言している（1886, p.193）。「規制」（régulation）の問題は、いうまでもなく《アノミー論》の要諦である。『分業論』における諸機関間の関係の規制、『自殺論』における個々人の肥大した欲望の規制、これらがそれぞれのアノミーを癒し《正常状態》をもたらす。

このように、かれにとって集合表象は個人に対する規制的な拘束の機能をもつものと解された。それが、後期になると集合表象は社会の「統合」（intégration）に正機能するものとして、注目されるようになる。たしかに、『自殺論』における自殺類型の設定において軸となったのは、《規制》と《統合》であったが、しかし、そこでの統合は具体的な集団への所属によって実現されるものであり、集団の集合表象への愛着・帰依というような観念的なレベルにおいては、論じられていなかった。集合表象はあくまで規制を担うものとされていたとっていいだろう。その統合的機能が明示化されているのは、『道徳教育論』である。

本書では、道徳性の要素として「規律の精神」（l'esprit de discipline）「社会集団への愛着」（l'attachement aux groupes sociaux）および「意志の自律性」（l'autonomie de la volonté）の三つがあげられている。そして、規律の精神は《規制》とそしてさらには倫理学上の《義務》の観念と、社会集団への愛着は《統合》とそして同じく《善》の観念とリンクするとされる。意志の自律性

についていえば、これは個人主義思想の中心理念である。ともかく、集合表象は個人を規制的に拘束するだけでなく、《善》という価値として個人をひきつけ魅了する。それはすなわち《理想》としての集合表象を意味するわけである。一つの理想のもとに集合体の成員は糾合し、集団や社会の統合が実現される。そして、同時代の社会的理想としてデュルケームが再確認したのが、ほかならぬ個人主義思想であり意志の自律性であった。

宗教研究への開眼（1895年とされている）のあと、次第に、デュルケームは宗教の規制的功能よりも統合的功能に分析の力点をおくようになる。同時に宗教における「聖-俗」（*sacré-profane*）カテゴリーの本質性を呈示する。そして、何度かの試みのあと『宗教生活の原初形態』において最終的な宗教の定義を打ち出すのである。

「宗教とは、聖的な、すなわち分離され禁止された事物に関わる信念と行事、つまり教会と呼ばれる同一の道德的共同体に、これに加入している全ての人びとを結合させる信念と行事、の連帯的な一体系である。」（1912, p.65）

この定義からは、宗教の表象としての性質だけではなく、行為・実践の体系としての性質も結論される。そしてさらに、デュルケームは社会を宗教現象として読み解いていくのである。すなわち、社会の聖なる理想（信念）は単にその善性のゆえに成員のこころを観念的に支配するだけではたりない。周期的に行われるさまざまな公的祝祭・式典など（行事＝儀礼）のなかで、成員はあたかもその理想が実現したかのように感じ、そのところに理想が強烈に刻印される。儀礼における「集合的沸騰」（*effervescence collective*）という非日常的な聖の時空こそが、理想としての集合表象を強化し、つまりは社会を周期的に再活性化する。しかも、理想はただ観念的なままに在るのではなく、さまざまなかたちで《象徴化》される。この象徴化された理想（ターム、エンブレムなど）によって、個々の成員は日常的な俗の経済生活のなかにあっても、社会の理想を想起し、こうして成員の日常的な統合は保持されるのである。はじめに示したテーゼ「社会生活は、あらゆる局面において、またその歴史のあらゆる瞬間に

において、その広範な象徴主義によってのみ可能となる」はこのことを表現している。そして、社会は個人の外部に確固たるものとして存立し、個人を拘束するものではなく、その理想を個人に内面化させて初めて社会たりうるのだ、とデュルケームは力説するのである。

4. 沸騰的社会変動

ここで、《聖》《集合的沸騰》《理想》《儀礼》《象徴》等の概念の関係性を明確にしておきたい。まず、デュルケームにおいて社会の基礎はその社会的基体である。そのうえに人々の社会生活があるが、この生活を規制しているのが制度としての集合表象である。しかし、さらにその制度の原理となり、またそれを正当化しているのが《理想》としての集合表象である。社会の成員が諸制度のもとで日常的な経済生活を送っているときは、この理想は例えば「自由」とか「平等」という言葉による《象徴》、あるいは「三色旗」のような物による《象徴》の在り方で、人びとの観念的統合を維持する。しかし、このままでは次第に理想の力は個々人の内部で衰退する。そこで、社会は周期的にこの理想を活性化すべく、《儀礼》を行うのである。すなわち、「祝祭、宗教的もしくは非宗教的な公的儀式、教会や学校などで行われるあらゆる種類の訓戒、劇の上演、芸術の発表、一言でいえば人びとを接近させ、かれらを同一の知的道徳的生活のなかで精神的に一体化させる一切のもの」(1911, p. 116) がそれである。こうした儀礼において、《象徴》は中心的役割を演じる。

この儀礼の時空において人びとの《集合的沸騰》が生じる。ここで実現されているのが、人びとの「集合力」(forces collectives)である。これが《理想》とされた観念にそして《象徴》に付着し、それらを《聖》なるものとして再生させるのである。すなわち、《聖》なるものがもつ恐るべき力は、集合力であるとデュルケームは見る。個々人の集合によって形成された力でありながら一度《聖》なるものとして観念されると、今度はそれは畏敬の対象になり、それによって自らが生かされているとさえ思われるようになるのである。こうして、

社会は一度形成されると、その後は周期的に儀礼的沸騰を繰り返すことによって、間欠的に自らの構成原理である《理想》を活性化しそれによって社会は命脈を保っていくと、デュルケームは考えたのである。

儀礼の集合的沸騰において、成員は日常的な制度を通り越して、あるいはそれを無視して（たとえば、無礼講、愚者の祭りなど）直接《理想》と一体化するわけだが、しかし周期的に行われる儀礼自体はすでに制度によってあらかじめプログラムされたものであり、この意味で儀礼的沸騰はそれがいかに過激なものであっても、依然として社会統合のカテゴリーのうちにあるといわねばならない。しかし、デュルケームは既存の理想を活性化する儀礼的沸騰のみでなく、新たな理想を創造する集合的沸騰をも構想している。かれはそれを「創造的沸騰」（*effervescence créatrice*）と名づける。ここに、社会進化論とは別個のかれの社会変動論を見ることができるのである。

デュルケームは論文「価値判断と実在判断」（1911）において、歴史的に意味のある創造的沸騰の例として、つぎのものをあげている。すなわち、「それはキリスト教の大危機であり、12、3世紀にヨーロッパの学問を志す人びとをパリにひっぱりこみスコラ哲学を生んだ集合的な熱狂運動であり、宗教改革とルネサンスであり、革命時代であり、そして19世紀の大きな社会主義による動揺である」（1911, p.115）。最後の社会主義運動を除いたすべてについて、かれは『フランス教育史』（1938）において教育思想との関わりで論じている。この点で、本書は単にフランスの教育制度の歴史にとどまることなく、その背景となったヨーロッパ思想史さらには社会史としても重要である。われわれは本書から、デュルケームの沸騰的歴史変動に対する興味深い見解を得ることができる。『原初形態』とあわせて注目すべき点をいくつか挙げてみたい。

まず、第一は、創造的沸騰は人びとの生命力あるいは活動力とも言うことのできる集合力の《過剰》性に依拠しているという指摘である。大学の起源を論じてデュルケームはつぎのようにいう。

「文明についての創造的時代は、まさしく人びとのなかに、生活のために必要とされることなく、ただ溢れでて消費されることしか求めない生命が

存在する時代なのだ……。」(1938, pp.79-80)

人びとにとっては普通、物質的生活を充足することが何にもまして重要な問題である(1912, p.497)。しかし、歴史のある時点において、日常生活で消費しきれなかった微細なエネルギーが蓄積され、《過剰》として一気に噴出する。この過剰性をデュルケームは、*pléthore* (過剰)、*surcroît* (余分)、*suractivité* (過剰活動)、*surexcitation* (過度の興奮)、*mouvements exubérants* (有り余る)などの多様な言葉で表現している。

第二に、こうした過剰なエネルギー＝集合力とそれによる過剰な活動の向かうところは、《知的》な領域とされる。デュルケームは集合的沸騰を基本的に知的な沸騰と見ているのである。もちろん沸騰状態は日常的な規範を笑い飛ばし、放埒や恍惚的な熱狂や一種の《^{フレネジー}狂乱状態》さえ生み出すことがある。こうした非合理的ともいえる集合力の爆発においてさえ、デュルケームは観念や理想を創造し社会を大きく展開させる知的な運動を見いだすのである。

さらに第三にあげるべきは、こうした知的な運動が諸個人の《身体》的な近接性を媒介にして展開するとされる点である。沸騰は人びとの集会状態において生じる。

「……社会的な相互作用が著しく頻繁にまた活動的になる歴史上のある期間が存在する。個人は求めあい、従来よりも多く会合する。その結果として、革命的あるいは創造的時代の特徴である全般的沸騰が生じるのである。」(1912, p.301)

そして理想は個人が相互に無媒介的な関係のなかで沸騰しているとき、その最高の強度を獲得するのである(1912, p.493)。これは、知的な創造性が人びとの身体的な近接性そして対面的コミュニケーションのなかから生まれるとする考え方である。

最後に第四として指摘できるのは、《闘争》の視点である。統合の理論家として流通しているデュルケームであるが、闘争の視点はまず《理想》間の矛盾・葛藤として『原初形態』で触れられている。

「社会は、自己を認識すべき様式をめぐって躊躇することがしばしばある。

あるいは、異なった方向に引っ張られるのを感じるのである。しかし、これらの葛藤（conflit）が明白になるのは、理想と現実とのあいだではなく、さまざまな理想のあいだ、すなわち昨日の理想と今日の理想とのあいだ、また伝統の権威をもつ理想とまさに生成の途上にある理想とのあいだにおいてである。」（1912, p. 604）

理想間の闘争は、当然それらの理想を掲げている諸集団間の闘争として、しかも理想を制度化する際に具体的なかたちで現象する。それは『フランス教育史』においてしばしば言及されている。たとえば、中世において大学が創設される際の、かつての学校の支配者であるカトリック教会と新興の教師の同業組合との闘争の記述は特筆すべきであろう。さらにデュルケームは、「この闘争（lutte）の過程ではじめて、この生まれたばかりの同業組合は確立し、鍛練され、自らを自覚し、そしてその個性を獲得したのである」（1938, p. 100）と述べ、集団の形成過程における闘争の機能を高く評価するのである。

このように、デュルケームは、新しい時代を主導し社会の原理となる新しい理想は、日々の日常生活の視角からは《過剰》でしかない《知的》な集合力の、個々人の《身体》的な近接関係のなかでの噴出すなわち集合的沸騰から創造され、しかもそれは古い権威である理想との不断の《闘争》を経て確立され、制度化されると主張するのである。

5. おわりに

最後に、この沸騰的社会変動と前期の社会進化論との関係性を示しておわりにしたい。まず、形式的な対比をおこなえば、進化論が《漸進的》歴史発展を呈示しているのに対して、沸騰的変動論は《段階的》歴史発展を主張する。すなわち、歴史には飛躍点が存在するという見解である。この飛躍点をデュルケームは集合的沸騰という非日常的な聖なる時空に見いだす。『分業論』では、動的＝道德的密度の増大は必然的に人びとの生存競争の激化をもたらすとされたが、後期の観点からみれば、それは日常的-俗的生活空間で生起することで

あり、高い道德的密度こそ、それが聖なる創造的沸騰状態ならば巨大な知的生産を結果するとされるわけである。聖-俗カテゴリーの有無がこの相違をもたらしていると思われる。

つぎに、進化論において歴史の過程は、因果関係を比較的明瞭に同定できる、いわば自然史的な不可逆の必然と観念されていたが、沸騰的変動論においては歴史過程は人間の試行錯誤の悪戦苦闘と見なされる。沸騰期に出現する次代を担う理想は、つねに過去の理想との闘争をへなくては、その栄光をかちとることができないし、かならずしもそれに成功するとはかぎらない。失敗する例もあるし、たとえ成功したかにみえても、フランス革命のような場合もある。

「革命の沸騰は、すてきに、新しい諸観念を創造した。しかし、革命はこれらの観念のために、それらを生かす機関やそれらを実現する制度をどうやって作っていいかわからなかったのだ。」(1938, p.349)

だからこそ、デュルケームは革命の理想が実は《道德的個人主義》であったことを百年もたって力説しなければならなかったのだし、また人格尊重の理想にそぐわない相続制度の廃止を主張しなければならなかったのである。さらに、たとえば、19世紀フランスの教育制度についていえば、文部大臣個人の考え方(理想)しだいで、その制度が大きく変わってきた例もあげられている。また、歴史が過去に引き戻される事態も指摘されている。このように、沸騰的変動論には、歴史変動は理想間の闘争、それを奉じる集団間の闘争、そして最後には権力者の闘争によって、急激に、緩慢に進行したり、あるいは逆行することさえあることが含意されているのである。

しかし、進化論と沸騰的変動論はデュルケームにあって、かならずしも相矛盾する理論としなくてもいいように思われる。結論を先取りすれば、進化論は社会変動のインフラストラクチャーの理論すなわち、社会的基体の変動論であり、そのうえに沸騰的変動論が位置づけられるといえるだろう。たしかに、進化論のみでは、歴史変動のダイナミズムは見えてこないし、沸騰的変動論のみでは、なぜある一時点において、ほかならぬこの理想が生まれ人びとに支持されるのか、説明できない。つまり、歴史変動の恣意性というアポリアを抱える

ことになる。両理論の相補的な関係性の追究こそ、今後の課題だろう。

文 献

- Alexander, J. C., 1988, Introduction, in *Durkheimian Sociology : Cultural Studies*, ed. by Alexander, Cambridge Univ. Pr.
- Bellah, R. N., 1965, Durkheim and History, in *Emile Durkheim*, by Nisbet, R. A., Prentice-Hall.
- Cherkaoui, M., Socialisation et conflit : les systèmes éducatifs et leur histoire selon Durkheim, dans *Revue française de sociologie*, XVII-2, 1976.
- Durkheim, E., 1886, Les études de science sociale, dans *La science sociale et l'action*, PUF, 1970. (佐々木・中島訳、恒星社厚生閣)
- Durkheim, 1893, *De la division du travail social*, PUF, 1930. (田原訳、青木書店)
- Durkheim, 1895, *Les règles de la méthode sociologique*, PUF, 1937. (佐々木訳、学文社)
- Durkheim, 1897, *Le suicide*, PUF, 1930. (宮島訳、中公文庫)
- Durkheim, 1911, Jugements de valeur et jugements de réalité, dans *Sociologie et philosophie*, PUF, 1924. (佐々木訳、誠信書房)
- Durkheim, 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, PUF, 1968. (古野訳、岩波文庫)
- Durkheim, 1925, *L'éducation morale*, PUF, 1963. (麻生・山村訳、明治図書)
- Durkheim, 1938, *L'évolution pédagogique en France*, PUF. (小関訳、行路社)
- Filloux, J. -Cl., 1970, Introduction, dans *La science sociale et l'action*, par Durkheim, PUF.
- Pearce, F., 1989, *The Radical Durkheim*, Unwin Hyman.

Pickering, W. S. F., 1984, *Durkheim's Sociology of Religion*, Routledge & Kegan Paul.

Rossi, P. I., 1983, *From the Sociology of Symbols to the Sociology of Signs*, Columbia Univ. Pr. (下田他訳、勁草書房)